



地区補助金事業に参加して

社会奉仕委員長 頃末 佳治

ロータリー財団より地区補助金事業として承認された当クラブのプロジェクトは、「呉地域における外国人児童生徒の日本語学習支援の為に、子供達の国籍や年齢に合った教材を贈ることにより、子供達の生活に直結した成果が期待できる」という内容です。そして、教材の贈呈式を、11月6日(土)広市民センターにおいて実施いたしました。

当クラブからは、梶山会長・上田幹事他11名の会員が参加し、RACからは岡原前会長が、夜勤明けにもかかわらず、手伝いに駆けつけてくれました。

一方、地域からは、外国人児童生徒の学習支援をしているボランティアグループ「ワールド・キッズ・ネットワーク」代表の伊藤様や児童生徒・ご家族・ボランティアの学生達の20名前後の参加がありました。

14時からの式においては、梶山会長から伊藤様に目録を贈呈し、子供たちの代表に電子辞書・お菓子をお渡ししました。この後、伊藤様からお礼の挨拶を頂いた後、全員の記念写真を撮って贈呈式は終了しました。

次は、子供達の作文発表ですが、学校行事と重なったこともあり、作文を書いた生徒本人が出席できなかったため、活動を支援されている広島大学大学院生の館野君が、白岳小4年の中野ビクトール君の「放課後クラブ」、同じく院生の田中さんが白岳中3年のヘケ・ルイザさんの「外国人だからわかること」を代読してくれました。

どちらも、素晴らしい内容でしたが、とりわけ「外国人だからわかること」では、日本人が外国人に対して発する何気ない言葉や態度が、いかに彼らを傷つけているか、お父様が家を購入しようと思って住宅展示場に行った際に、係りの人から「外人」には売らないと言われて、温厚なご家族が深く傷ついたといった内容が、冷静かつ明晰な文章で書かれており感銘の深い作品でありました。彼女は、この作品で「呉市中学校総合文化行事」のスピーチコンテストにおいて、最優秀賞を受賞されています。

作文朗読の後は、皆で交流会を行いました。ブラジ

ル料理を我々の為に用意していただき、おいしく頂きました。料理名は、後で確認したのですが「コシーニャ（涙型をしたブラジル風コロッケ）」「ヒゾーリス（ミンチ等を小麦粉で包み油で揚げた半月型のおやつ、会員の間では勝手にブラジルギョウザとの声が）」「胡桃のケーキ」を頂きながら、子供たちとの会話を楽しみました。

そして、最後はブラジルにおいて「カエルプロジェクト」（日本からの帰国子弟の学校や社会への受け入れへの取り組み）コーディネーターの中川郷子先生・伊藤様、そして、子供達の代表としてカイオ君（呉高専学生）、プリシラさん（高校卒業後は呉で就職、大学進学は家族でブラジルに帰ってから。将来の夢は女性大統領とのこと）とRC会員で懇談会を持ち、「ブラジルの教育状況と支援事業」について実情を伺った後、意見交換を行いました。

ブラジルにおいては1992年から出稼ぎ現象が起きたが、長期間（人によっては15年）日本で就労した家族の子供たちが母国ブラジルに帰ってきた時、学校への編入の際に様々な問題が生じており、受け入れ態勢の整備（心理的・社会的・教育支援及びブラジルの社会文化・習慣・ルール等の補習）が急務だが、日系人がブラジル全体の0.7%のマイノリティであることに加え、その内の30%が出稼ぎ現象の対象である為、ブラジル国内で目立たない存在となっており、対応が充分でないとお話でした。

ブラジル・日本の子供達の問題は、深くつながっており、呉地域における外国人子弟の実情を我々RC会員が認識し、クラブとして、個人としての支援を継続することが如何に大切であるかを再認識した次第です。

